

# 三池と若者

熊谷 博子

東京新聞 夕刊コラム『放射線』（現・『紙つぶて』） 2007年3月26日

日本最大だった三池炭鉱が、3月30に閉山10年を迎える。

ドキュメンタリー映画『三池 終わらない炭鉱（やま）の物語』を作っている時、何で今さら、とよく聞かれた。囚人労働、強制連行、そして戦後の争議、事故と、まさに日本の歴史の縮図で、そこに生きた100人近い方々の証言を撮影し、7年がかりで完成させた。

昨年、東京などで異例のロングランとなり、JCJ（日本ジャーナリスト会議）特別賞もいただいた。公開当初は、観客は体験世代が多いだろうと予測していた。ところが日ごとに若者たちの姿が増えた。しかもカップルで観に来て「これまでどれだけ真剣に生きてきたかつきつけられた」と泣いている。「一回目は感動した、でも二回目は知らなかったことを恥と感じた」とも。どうしても観てほしいと、大学生の娘が父親を連れてきたケースすらあった。

いかに私たちが知らせてこなかったのか、知らせ方を間違っていたのかを痛感した。でも私自身が炭鉱の歴史をよく知っていたわけではない。その歴史を“負の遺産”と言う人もいて、怒りを覚えた。それだけで、映画作りに突き進んでしまった。

閉山10年の夜、地元の福岡県大牟田市で、『三池』の再上映をする。その際、先月の夕張国際学生映画祭でこの映画を上映した若者たちが、私と一緒に観客に話をする。夕張の学生も東京の学生もいる。彼ら自身が、この映画を観、上映し、人々の反応を知ることによって大きく変わったからだ。

これを期に、近くの福岡市内でも初めての劇場公開が始まる。また多くの若者たちが観てくれて、新しい発見をしてほしいと思う。